

市川(砥堀工区)の改修計画作成に着手します

第1回市川砥堀工区河道計画検討委員会が開催されました!

平成28年12月8日(木)10時より、兵庫県立姫路労働会館2F大会議室において、第1回市川砥堀工区河道計画検討委員会が開催されました。

第1回委員会では、

- 改修で川底を掘り下げて川の普段の水位が低くなると、これまでと同じように堰から農業用水をとれなくなってしまうのではないか、
- 今の井堰は固定堰だが、可動堰にするのか、樋門等の改築にあたり、歴史的な価値や景観を残すことも考えているのか、
- 平成23年の洪水のときは市川本川の水位が高かったので、支川の洪水が逃げ場を失って浸水被害が発生したが、これらの対策も考えていくのか、
- 組合員の高齢化や後継者不足など今後の井堰の管理体制に課題があり、可動堰に改築した場合の維持管理や洪水時の対応に不安が残るなどの意見がありました。



【市川砥堀工区河道計画検討委員会委員メンバー】

- | | |
|-----------------------------|--------------------------|
| ●藤田 一郎(神戸大学大学院工学研究科教授)／委員長 | ●高橋 齊(水上地区連合自治会長) |
| ●田中丸 治哉(神戸大学大学院農学研究科教授) | ●金澤 博美(砥堀地区連合自治会長) |
| ●三橋 弘宗(兵庫県立大学自然・環境科学研究所 講師) | ●岸本 英夫(花田地区連合自治会長) |
| ●村田 和宏(姫路市立城郭研究室長) | ●合田 仁(県土整備部土木局河川整備課長) |
| ●中尾 視門(飾磨井堰水利組合長) | ●井上 博晶(姫路市下水道局長) |
| ●井上 哲夫(花田井堰中代表) | ●寺谷 毅(中播磨県民センター姫路土木事務所長) |

【特集】

人々の暮らしと市川は
深いつながりがありました



平成29年3月号

2017 VOL.1

※砥堀工区とは、砥堀、水上、花田地区のことです。



この絵は今から約150年前、美作(今の岡山県)の医者が画家を連れて、神戸などに見物に出かけ作成した道中図(美作道・西国街道道中絵図<個人蔵>)をもとに着色等改作させていただきました。

当時の市川右岸の渡し場の様子がいきいきと描かれています。船は竿で漕ぎ、牛が同乗しているのは浅瀬を越える際に牛に船を曳かせるためとのこと。橋のなかった時代、市川と人々の暮らしは深くつながっていました。穀物が豊かに実る一方、度重なる洪水被害に苦しめられてきました。飾磨井堰や花田井堰がある砥堀工区は、今でも洪水を防ぐための重要な場所です。先人の功績を訪ねてみました。



このニュースレターについてのお問い合わせやご意見は、下記までご連絡ください。

兵庫県中播磨県民センター 姫路土木事務所 河川砂防課

TEL:079-281-9483 FAX:079-281-4948 Eメール:himejidoboku@pref.hyogo.lg.jp

特集：人々の暮らしと市川は深いつながりがありました

江戸時代の「寛延二年大洪水」で多くの人が亡くなりました

寛延二年大洪水(かんえんにねんだいこうずい)は、寛延2年(1749年)7月3日に市川が決壊し、船場川沿いで起きた水害です。市川取水口である飾磨樋門(大樋)が決壊し、家屋流失161戸、溺死者408人を記録し、特に船場地区は322人の死者を出しました。



山脇の溺死菩提碑
旧山陽道沿いの四郷町山脇の民家の奥にあります



飾磨樋門は明治36年に昔の10倍も強固なものになりました



飾磨樋門(大樋)

飾磨樋門(大樋)完成に不屈の精神で挑んだ中安繁治翁

「水利は村民の命であり、いと名み続けられていくものである。」
飾磨樋門脇にある「中安繁治翁功績碑」にはそう記されています。江戸時代姫路藩が一石を充てて建設と管理をした樋門は、明治維新後は村民の手による管理となり、村の名家中安家が村長となって治水を行っていました。しかし、中安繁治翁が村長になった後の明治35年、作った水門が大雨で破壊され、まちに多大な被害が出てしまいます。ひるむことなく多大な費用を投じて、閘門三条を起工。レンガと花崗岩を使用し、門扉の開閉機を築造し今日まで続いています。



ほ〜大変だったんですね



中安繁治翁



中安繁治翁功績碑



飾磨樋門(大樋)



仁豊野駅



市川の名前の由来は？
市川の下流域、現市之郷もしくは現飾磨区細江に、歌枕としても著名な「飾磨の市」があり、物質流通の拠点でした。この市の名をとって市川という名が起こったと伝えられています。



江戸時代の高瀬舟に似た形の舟が保存されています

姫路城主本多忠政が当時市川の本流であった船場川を改修し、飾磨津から現在の市川町あたりまでの高瀬舟による物資運搬の船運を開き、保城や西中島に船着場が設けられていました。
飾磨樋門(大樋)にある倉庫に高瀬舟に似た形の舟が保存されています。



姫路市教育委員会文化財課主任文化財専門員
宇那木 隆司先生からひと言

市川は姫路平野の入口にあたる砥堀で河床の標高が23m、平地の標高が24~5mのため比高差が少ないことから砥堀から下流は氾濫原となり、市川が上流から運んだ砂礫の堆積で姫路平野ができました。池田輝政が姫路城下町を建設したとき市川や船場川を整備、さらに本多忠政が元和7年(1621)に市川取水口から船場川筋を整備しました。しかし寛延2年(1749)の大雨増水は市川の洪水、船場川取水口である飾磨樋門(大樋)の決壊となり、姫路城下町をはじめとする浸水被害は多大でした。姫路藩は「姫路城下浸水被害図」を作成して幕府に提出したと思われるが、姫路の町のみならず姫路平野を洪水被害から守るうえで、姫路平野の入口にあたる砥堀工区は極めて重要な場所なのです。